

たと聞いて来る。

風呂に入つてめしを食つて辻潤は歸つた。

旅館の主人は郵便局へ出てゐる。

女中は十五六の髪の毛と頬の赤い此の前と同一人だ。

『お春さんがよろしく言ひました』と翌朝、お給仕に來た時言つた。

海岸の松原はよかつた。

砂濱はひろかつた。

大平洋の浪は漁師共の目をくさらしてゐた。

新吉は帽子を逆さまにかずいて、林檎と、臺灣歸りの人に船の中で、かへこして貰つた砂糖キ  
どの、三尺ばかりの莖の赤いのを持つて、ブラ／＼出歩るいた。

小學校へ行つて校長に、春子の寫眞がみたいとか、成績品が知りたいとか言つた。

役場にも寄つて、戸籍謄本を見せて貰つてうつしたりした。

はがきを書いて出した。